

最新の発掘成果に基づいた安土城天主の復元的考察

A study on the Tensyu in Azuchi castle based on the results of latest excavation

広島大学大学院人間社会科学研究科 助教 中村泰朗

（研究計画ないし研究手法の概略）

安土城天主は史上初めての本格的な五重天守であり、一階から三階までが豪華な書院造の部屋によって構成された。天正年間にまで建築年代が遡る武家殿舎のうち、平面構成が具体的に明らかになる例は数が限られる。そのため、同天主を正確に復元できれば、城郭建築のみならず住宅建築の発展を解明するうえでも重要な知見を与えることになる。

本研究では、①同天主の主要な先行復元案について妥当性を検証した。②『信長公記』の異本を校訂し、天主復元に際して史料として信頼できるものを考定した。③発掘調査によって得られた天主台に関する知見をまとめ、遺構に基づいた天主台上端平面の復元を行った。④『信長公記』の記述内容と天主台の特徴に加え、後世の天守に共通して見られる建築的構成を統合的に考えることで、一階から三階までの大まかな平面構成を明らかにした。⑤安土城天主の全体像を知るための端緒として、一階から三階までの平面構成を具体的に復元した。

（実験調査によって得られた新しい知見）

ここでは紙幅の都合により、上記④を中心に本研究で得られた知見をまとめる。

1. 「安土日記」および天主台の統合的検討

穴蔵と三階身舎の広さ

遺構に基づいて天主台上端平面を復元すると図1が得られる。同図によると、穴蔵の礎石列は南北9間×東西8間で構成された（北西部分に幅1間の突出あり）。したがって、穴蔵の広さは概して72間となる。また『信長公記』の異本のうち、尊経閣文庫蔵「安土日記」の本文は史料としての信頼性が認められる。

同日記の一階から三階までの項目を通読すると、当該階における全ての部屋の広さを明記した階は三階に限られる。そして、三階における全ての部屋の広さを足し合わせると、135畳すなわち67.5間となる。ただし、同日記では階段が設けられた部屋（階段室）が記されていない。そこで、先述した値に階段室の広さを足し合わせると、三階において部屋が配された部分の広さは穴蔵とほぼ等しかったことが推定できる。

また後世の望楼型天守を見ると、三階の身舎の周囲には破風の間と大型の出窓など

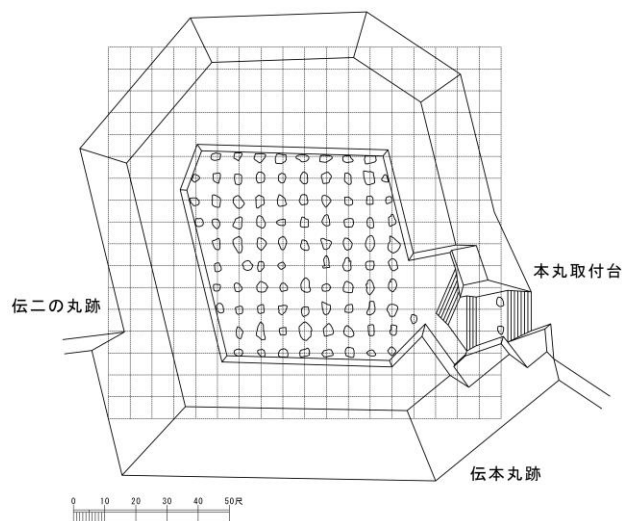


図1 天主台上端復元平面図

が設けられた。ただし、「安土日記」四階の項目を見ると、「南北の破風に四畳半之御座敷兩方在之」とある。これは、南北の破風の間には4畳半の座敷が設けられたことを示した一文であって、同天主において破風の間内部に何らかの部屋を設けた場合、同日記では当該の部屋が破風の上に位置したことを明記した可能性が高い。

この点を踏まえたうえで同日記三階の項目を見ると、各部屋が破風の間や出窓などに位置したことを示した記述はない。したがって、同日記に記された三階の各部屋は、同階の身舎内部に配されたことが分かる。つまり、同階における身舎の広さは穴蔵の広さとほぼ同大であった。

一・二階の身舎と入側

天守は上階に向かって平面が逡減するため、上階の身舎よりも下階の身舎が狭くなることは管見にない。したがって、安土城天主でも二階の身舎は三階の身舎と同大、もしくは三階の身舎よりも広がったと判断できる。

ここで「安土日記」二階の項目を見ると、「御縁二段ひろ縁なり」とある。「ひろ縁」すなわち広縁が身舎の内部に存したとは考えられず、また「二段」とあることから、同階の広縁は長押を境にして床高が高い部分と低い部分に区分された。この場合、二階では身舎の周囲に設けられた入側を書院造殿舎における広縁と見做し、その床高が二段に分かれていたことになる。さらに言えば、広縁である以上、その幅は床高が高い方・低い方ともに一間はあった。つまり、二階の入側の幅は都合2間であったと考えられる。

一階の身舎は二階の身舎と同大、もしくは二階の身舎よりも広がった。また、天守では上階の入側よりも下階の入側が狭くなることはない。したがって、一階の入側は2間以上の幅を有したと考えられる。

一階の北側に位置した土蔵

「安土日記」一階の項目には、「北之方御土蔵有」とある。しかし、後世の天守を通覧すると、天守内部（穴蔵を除く）に土蔵を設けた例は見当たらない。また前掲図1によれば、天主台上端平面は北側が他に比べて広がっていた。これらのことからすると、当該の土蔵は天主台北側の幅が広がった部分にあり、天主本体とは構造を異にしたと考えられる。

この場合、当該の土蔵は天主本体とは完全に分離したもの、もしくは天主より突出した付櫓状のものが想定できる。ただし「安土日記」を見ると、土蔵と隣接する部屋との間に、外部に出たことを示唆する記述はない。また同日記二階の項目を見ると、北側に土蔵の上部空間を述べた箇所はない。したがって、当該の土蔵については、天主本体より突出した付櫓状のものであり、かつ一階建てであった可能性が高いと言える。

小結

ここまでの検討をまとめると、平面の復元を進めるのにあたり下記の条件が得られる。

- 条件① 三階身舎は穴蔵とほぼ同大であった。
- 条件② 二階身舎は三階身舎と同大もしくは三階よりも広く、入側は2間幅であった。
- 条件③ 一階身舎は二階身舎と同大もしくは二階よりも広く、入側は2間幅以上であった。
- 条件④ 天主台上端は北側の幅が広がっているが、ここには付櫓状の土蔵が存した。
この土蔵は一階建てであった。

なお前掲図 1 によれば、穴蔵礎石列の北端から天主台外周部の北端までの幅は最大で 4 間半程度であり、穴蔵礎石列の南端から天主台外周部の南端までの幅は最大で 2 間半程度である。ただし、内藤昌氏が指摘したように⁽¹⁾、建築年代の古い天守では天守台外周部から建物までの間に、ある程度の余白を設けることが多い。この部分の余白は大雑把な土木スケールで築造された石垣に、建物を上乗せする際の調整を図るための部分であり、技術的に未発達な古いものほど余白が大きくなる。広島城天守や岡山城天守などといった慶長年間初期の例を見ると、当該部分の幅が 1.5 尺から 2 尺程度である。安土城天主の竣工は天正七年であるため、当該部分の幅は広島城天守や岡山城天守などよりも広く、基準柱間寸法にして半間程度はあったと考えられる。

したがって、天主台上端平面のうち建物が存したのは、穴蔵北端の礎石列から 4 間分、穴蔵南端の礎石列から 2 間分程度と考えられる（条件⑤）。

2. 天主本体の建築的構成

一階の平面構成

まずは一階平面の南北幅を考える。条件①・②・③より、一階の身舎は穴蔵と同大もしくは穴蔵よりも広がった。さらに、条件③・④より一階には幅 2 間以上の入側と、北側に付櫓状の土蔵が存した。

ただし、入側の幅が 2 間よりも広がったと仮定すると、条件⑤によって、土蔵の南北幅が 1 間ほどとなるため、極めて使い勝手が悪く不適切である。その一方、土蔵の南北幅が 2 間よりも広がったと仮定すると、身舎の北側および南側に幅 2 間の入側を設けることが不可能となる。つまり、先にまとめた条件と合致する一階の復元平面案としては、身舎の南北幅が穴蔵と等しく 9 間で、その位置は穴蔵の直上にあった。身舎の南北端に沿って幅 2 間の入側があり、さらに北側には南北幅 2 間の土蔵が存したことになる。

ここで改めて前掲図 1 を見ると、穴蔵礎石列の東端から天主台外周部の東端までは最も広い箇所が 3 間となる。ただし、東側の入側の幅が 3 間であったとすると、入側端部が天主台上端よりも大きく張り出すことになる。さらには、地階側柱の足元が天主台虎口の石段上に位置するため、柱を立てることが極めて困難となる。したがって、東側の入側の幅も南北の入側と同様に 2 間であったと判断できる⁽²⁾。

次いで西側の入側について、穴蔵礎石列の西端（北西の突出を除く）から天主台外周部の西端までは最も広い箇所が 4 間となる。しかし、北・南・東側の入側が等しく 2 間幅であったことを考えると、西側についても入側は 2 間幅であったとするのが妥当と言えるだろう。この場合、西側において天主台外周部と天主本体との間に大きな空地が生じることとなる。

ここで加藤理文氏の見解を参考にすると⁽³⁾、伝二の丸東溜り（天主台南西面石垣裾部）より検出した礎石列は、階段を内包した廊状の建物の遺構であるという。同氏によれば、当該の建物は伝二の丸東溜りから伝二の丸跡に存した御殿へと上がるためのものであると同時に、踊り場を設けて直角に振ることで御殿と天主とを繋いだ可能性がある。フロイス『日本史』の記述によれば⁽⁴⁾、安土城主郭に存した諸殿舎は廊状の建物によって繋がっていたことが知られるので、加藤氏の指摘は蓋然性が認められる。加藤氏の指摘の通り、当該部分に廊状の建物が存したとするならば、前述した天主西側の空き地は廊状の建物を天主へと接続するための余地と考えることができるだろう。

つまり、安土城天主の一階平面は穴蔵の直上に南北9間×東西8間の身舎があり、その四周に幅2間の入側が廻った。天主台北側の幅が広がった部分には天主本体より突出した付櫓状の土蔵があり、この土蔵は南北幅が2間であったと考えられる。

二・三階の平面構成

一階および三階の身舎が穴蔵と同大であったので、二階の身舎についても、自ずと穴蔵と同大であったことが分かる。また、一階の身舎が穴蔵の直上に位置したことからすると、二・三階も同じく穴蔵の直上にあったと考えられる。すなわち、安土城天主は一階から三階までの身舎が穴蔵と同大であり、かつ各階の身舎が専ら穴蔵の直上に位置した。このような建築的構成をもつものとしては、岡山城天守や松江城天守など、古式を残した望楼型天守に類例を見出すことができる。

3. 復元の方針

安土城天主の平面構成を復元する際に、基本とすべき史料は尊経閣文庫蔵「安土日記」本文である。また同日記本文には天主台上端平面については述べられていないものの、先に検討をしたように、現存する遺構に基づくことで正確な上端平面の復元が可能である。

同日記には各部屋の広さや障壁画の画題は詳細に記載されているが、部屋が配された身舎全体の規模が記されていない。そのため、従前の研究では各階の平面構成を確定させることができなかつたと考えられる。しかし先に検討を加えたように、「安土日記」の記述内容、天主台の特徴、そして後世の天守に共通して見られる建築的構成を統合的に考えると、安土城天主の一階から三階までの身舎は穴蔵とほぼ同大であり、穴蔵の直上に位置したことが分かる。そして、穴蔵の広さは礎石列にして南北9間×東西8間であるので、「安土日記」に記載される各部屋（ただし土蔵などの特異な空間は除く）を上掲の範囲内に収めるように復元する。

なお、同日記によれば安土城天主の内部には複数の納戸が存した。これらの納戸について三浦正幸氏は⁽⁵⁾、納戸の数が一階だけでも7室を数えるため、同天主の納戸の全てが当時の住宅建築のように寝室としての機能を有したとは考えられないとした。そこで天正年間における納戸の使用法を見ると、同十四年に大友宗麟が家臣へと送った書状によれば、豊臣大坂城本丸御殿の納戸には金子や小袖などが保管されていた。また秀吉は天守内の数室を調度品・金銀・武具の保管庫として使用し、大坂城を訪れた者に対して秀吉自身が天守を案内したうえで品々を観覧させた。秀吉は信長の城郭政策を引き継いで天守を築いたことが知られているため、秀吉と同様に信長も安土城天主の納戸を調度品などの保管庫として使用したと考えることができる。

ここで、二条城二の丸御殿大広間をはじめとした三つ以上の部屋列を内容した住宅建築を見ると、金碧障壁画を用いた部屋列は採光条件の良い入側に面した部分に、納戸列は光が届きにくい内側に置くことが多い。さらに付言しておくとして、同一の部屋列であれば部屋境の柱筋をみだりに不揃いにはしない。例えば三つの部屋が南北方向に並んで部屋列を構成した場合、それぞれの部屋の東西幅は同一となる。

ここまでの検討を踏まえたうえで復元を進めると、安土城天主一階から三階までの復元平面図が得られる（図2）。

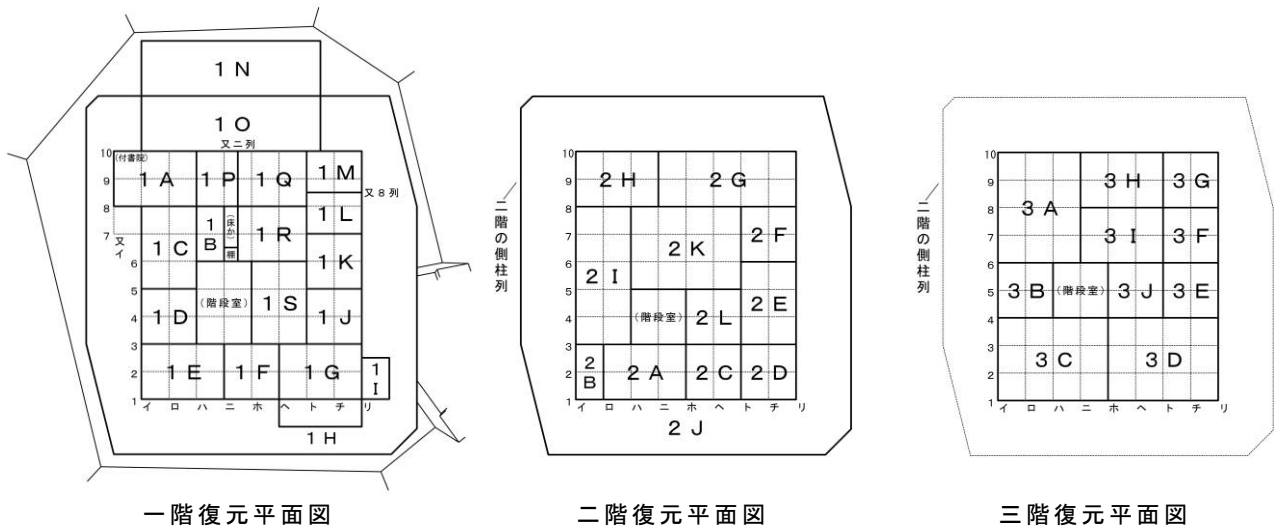


図2 安土城天主復元平面案

4. 今後の課題

本研究で得られた一階から三階までの復元案は、中世末期から近世初頭にかけての城郭建築・住宅建築と特に大きな矛盾が見られない。したがって、手元に揃う史料の限りではあるものの、安土城天主の復元案として妥当性が高いものと評価できる。今後は、四階以上の平面に加え、断面・立面構成を詳細に復元する。そして、史料によって分かる範囲で安土城天主の全容を明らかにし、改めて同天主の城郭建築・住宅建築史上における特質を考察する。

(発 表 論 文)

- ・「安土城天主に関する復元的考察 一階から三階までの平面構成」『建築史学』
投稿準備中

-
- (1) 内藤昌「安土城の研究(上)」『國華』第987号、7～117頁、1976年2月。
 - (2) 東側の入側の幅を2間とした場合でも、隅部はわずかに天主台上端よりも突出する。この部分については、岡山城天守のように天主台上端の形状に合わせて、入側の幅を減じたと考えられる。
 - (3) 加藤理文「安土城主郭部の構造」『織豊城郭』第14号、115～130頁、2014年9月。
 - (4) フロイス『日本史』第53章(松田毅一・川崎桃太訳フロイス『日本史』5、五畿内編Ⅲ、中央公論社、1978年6月)。「信長は、この城の一つの側に廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿を造営したが、それは彼の邸よりもはるかに入念、かつ華美に造られていた」。
 - (5) 三浦正幸「近世城郭における天守の室内意匠について」『家具道具室内史』第11号、28～43頁、2019年6月。